HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	超分節要素の文法的機能
Author(s)	福村, 虎治郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 18(2), 1-28
Issue Date	1970-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33342
Type	bulletin (article)
File Information	18(2)_PL1-28.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

超分節要素の文法的機能

福　村　虎治郎

超分節要素の文法的機能

福　村　虎治郎

（1）

意味に対するものとしての言語の形態では文字よりも音が主であり，しかも分節的な音ばかりでなく，それに伴う強勢・音調・位置なども形態に含まれるということは一般に認められていたが，実際の研究では，それ程これは表面に出てきていなかった。しかし次第にこの点に注意が向けられるようになってきていたとき，アメリカの構造言語学派が音形態を表面に持ち出し，更に分節音素 (Segmental phoneme) に対して，強さ・高さ・連接 (Juncture) 等超分節要素 (Suprasegmentals) を正面に出し，これを分節音素と同列においた功績は大である。

一方，この音形態，殊に超分節要素は書形態と比較して，変動性が強いことも一般に認められていた。現実の言語で音と文字との対応が不規則なことは普通であるが，その重要な原因の一つは文字の安定性に対する音の変動性である。これは通時的に認められるばかりでなく，共時的にも実証される。ある任意の言語は，文字の面から推測される程決して統--的なものでなく，殊に超分節要素においては方言的違いが著しい。この要素に方言的違いが目立っていても，それが社会的に，慣習的に決っているものならば，それは言語的に適切 (relevant) なのであるが，ときにはこの適切性が疑わしいこともある。換言すれば，それは純生理的，純心理的現象でないかと思われる場合も稀ではない。

（2）

さてアメリカの構造言語学派がこの超分節要素をとりあげ研究した

結果を調べてみてもこの感が強い。例えば，他の形態要素からは同じ，または同じ型である，もしくは似ているものが，それに伴う超分節要素からは同じでなく，しかも意味が同じであることが珍しくない。例えば，所謂名詞が形容詞役を果している構造 (*e. g.* a stone house) において，アクモントは「形容詞十名詞」型と同じく，アメリカ式ではへ / が普通のようである。例えば，Hill, stône hóuses (18 p. 176)*, Sledd, whîte hóuse (47 p. 33). Fries でも「形容詞＋名詞」と同じ音調で示されている。a stone wall (12 p. 225)

傳統派**では強勢を三段階に認めるのが普通であるが，その場合は両部分同じ強さである。Hornby, ˈleather ˈjacket (21 p. xi), Allen, ˈScotch˝ whisky (2 p. 6)。ところが，Whitehall では lòng hóuse (51 p. 26), Gleason によると bláck bîrd (14 p. 45), gréen hôuse (p. 109), Lloyd and Warfel によると，同様に stóne wâll (31 p. 251). Trager and Smith も文中において，whíte hôuse を認める (48 p. 39)。

一方複合語になったときは，/ ＼ が普通である。Gleason, bláckbìrd (p. 45), Sledd, Whíte Hòuse (p. 33), Lloyd and Warfel, stónewàll (p. 251). Hill も同じであるが，しかし彼は gréenhôuse, bláckbîrd (p. 17) をも認める。また ＼ / をも認める。Nèw Déal (p. 177). Bloch and Trager (6 p. 48) では bláckbîrd である。

これを見ると，語群の場合と複合語の場合と同じ型になることもある。そこで，方言の違いかどうか調べる必要も生ずる。音素の相互関係を論ずるとき，'overall pattern' の価値は疑わしいものであり，構造はある一つの方言について論ぜられなければならない。しかし Gleason や Hill の個人言語 (idiolect) においても，所謂一語や語群に両方の強勢型があることも明かである。また後でも述べるが，このような

* 数字は末尾にある参考文献の番号を示す。以下同じ。

** 現在では，構造言語学派も変形生成文法派にとっては，伝統派と考えられているようであるが，ここでは構造言語学派が考える伝統派である。

語群や複合語が実際の文の中にあるとき，その強勢の型が文から離れて発せられたときと同じにとどまるかどうかも考えなければならない。以上の例では，その区別にはあまり注意されていないようである。 Gleason, Sledd, Lloyd and Warfel では文の構成要素としても示されている。

（3）

文や節の音調 (Intonation) においてもそうである。アメリカ英語とイギリス英語の音調の違いはよく言われる (cf. Schlauch, 45 p. 191). Allen によると，"Can you come?" he asked, quietly. の he asked, quietly は前の部分の上昇調を継続する (2 p. 154)。Kingdon も同様に考える (25 p. 120)。ところが，Lloyd and Warfel によると，"Did he go to the movies?" asked Jim. において，asked Jim は前の部分の 2—3 の 3 のままにとどまる。少くとも区別された次の高さ 4 には達しないようである (p. 314)。これも両言語の違いか，またはもっと狭い範囲の言語社会に適切な音調型か調べる必要がある。実際他の点では同じ型のものがそれに伴う音調の点では異なって示されていることは普通である。

次に，音調に関して，個々の具体例をあげてみる。例えば，下の文は Allen (2 p. 47) によると，letter と it の後で句切れるイギリス英語式の下降調の繰り返しである。

She gave him a letter and told him to post it, but not to be too long about it.

Kingdon (25 p. 82) もこのような構造の文に下降調の繰り返しを認める。Sledd (47 p. 30) によると，次の文は，前半と後半は同じ型ではないが，ともかく下降調の繰り返しで，連接は平板 (level) である。

^{2}I ^{3}called him, $^{2\rightarrow 2}$but he did not ^{3}answer.^{1} ↘

ところが，Roberts (44 p. 276) では，次の文は 2 3 2 と 2 3 1 の結合で，この点 Sledd と同じであるが，これらの間の連接は上昇 (rising)

で，この点では異なる。

We believed in him completely, and we decided to help him.

しかし Roberts は therefore で結ばれる例を示し，音調型は一つではないとし，アメリカ英語式の下降調「2 3 1＋下降連接」型の繰り返しをも認めており，従って Allen に接近する。Armstrong and Ward (5 p. 26) も先の部分に上昇調のくることを認める。Jones (23 p. 290) は次の文を「Ⅱ＋Ⅱ＋Ⅰ」型で示している。

He took his hat, ran downstairs, and hurried out into the streets.

所謂複文 (Complex sentence) についてもそうである。Jones (23 p. 290) によると，次の文は上昇調 (II) と下降調 (I) の結合型である。

If it succeeds, I shall make a fortune.

Allen (2 p. 59) によると，次の文は同様に「Ⅱ＋Ⅰ」である。

When he came, I asked him to wait.

Ripman (42 p. 157) によると，次の文が同じ型の音調をとる。

When the barometer falls, we may expect bad weather.

H. E. Palmer (38 § 39) も同じ型の音調を認める。アメリカ英語でも，上昇と下降の結合では同じである。

If you don't hurry you'll never get there. (Anderson, 3 p. 86)

When he comes we can all discuss it. (ibid. p. 87)*

しかしこの音調の結合は必ずしも守られず，先の部分に下降調がくることもある (Jones, 23 § 1032, Schubiger, 46 p. 69). H. E. Palmer にも，次の例が下降と上昇で示されている (38 p. 208).

Even if that's true, it doesn't make any difference.

従尾節が後にくる場合，Jones (23 p. 289) によると，上の場合と同様，「Ⅱ＋Ⅰ」型である。

We came home because it was raining.

Ripman も同様である (42 p. 157).

---

* 原書では発音記号で書かれている。

His spirits rose, as he walked along.

ところが，Jones (p. 296) によると，時折 (sometimes)「Ⅰ＋Ⅱ」型である。

We'll start immediately if you're ready.

Armstrong and Ward は非常に普通だというのではないが (not very common) これを認める (5 pp. 27, 35).

I don't think he ought to go, when he is so busy*.

Lee (27) によると屢々聞かれる (often heard).

You'll be hungry before it's five.

H. E. Palmer(38 § 39) によれば，この結合は普通のようである。しかし §§ 409–421 には Jones 風に考えての上昇と下降の結合の例が沢山見られる。Kingdon (25 pp. 79–80, 26 p. 35) によれば，下降と上昇の結合は代表的な結合型の一つである。

答に yes または no を要求する疑問文では次のような例が見られる。Armstrong and Ward(5 p. 28) では，次の文は「Ⅱ＋Ⅰ」である。

Do you remember, Smith, we discussed this question last year ?*

ところがこれが単一の音調型Ⅱともなる。

Can you buy me a newspaper while you're out ? (Allen 2 p. 54)

かくして，二つの音調型が結合したものか，もしくは単一の型か，区別は屢々困難である。(Kingdon 25 p. 79, Schubiger 46 p. 89). 例えば，O'Connor and Arnold (35)では，次の複文は一つの音調型で発せられている。

I shouldn't be surprised if it was over by the time we get there. (p. 31)

Yes, but even when he does come, he won't be much help. (p. 66)

Can I see him if I come back later ? (p. 103)

---

* 原書では発音記号で書かれている。

Ripman (42 p. 157) では，次の文は「Ⅰ＋Ⅱ」である。

When you were in Italy, did you stay at a hotel?

Jones (23 p. 290) では，「Ⅱ＋Ⅱ」である。

When you got to London, did you go straight to the hotel?

がしかし，p. 296 では，これが「Ⅰ＋Ⅱ」で Ripman と同じである。

（4）

このように見てくると，彼等の記述が正しいとすると，時代の違いか，地域の違いか，もしくは個人的な違いか，ともかく違いがある。そして節が従属であるかどうか (Kingdon 26 pp. 34–35)，また節が文の終りにあるかどうか (Jones 23 § 1032)，また主節そのものが疑問か陳述かどうか，それによっての節と節との音調型の対応 (Ripman 42 p. 157) などによって音調が左右されている。

しかし，これらは音調に関して，必ずしも同じ結果をもたらさない。また同一人においても，分節要素からは同一型の文が異なる音調をとり得ることも認められている。そして音調の違いに応じて意味の違いがあることもあるが，その違いが認められないこともあり (cf. Jones 23 § 1044)，それが困難な場合もある (cf. H. E. Palmer 38 §§ 36–37). ときには，節を導く接続詞の意味の違いによって，この節の音調型が異なる。if に導かれる節において，if が 'even if' の意味のときは，この節は下降調であり，そうでなければ上昇調となる (Lee 27 p. 62). H. E. Palmer (38 p. 208) でも，although, though, even if 等に導かれ譲歩を意味する節は下降調で示されている。

また何かしら意味の違いを認めたとして，その意味とされているものが，話者のその時々の確信や疑念，関心の有無，愛情の強弱などであることもあり，これは純心理的なものであり，言語の意味として妥当かどうか問題である。従ってそれに応ずる音調も，原因・結果の関係において，これら心的状態に応じて生じた純生理的なものではないかと疑われる。

上の例は，英語の音調を上昇と下降に二分する立場に立って述べたのであるが，この音調の型そのものが意見の一致を見ていない。イギリス英語とアメリカ英語でも異なる。Jones (23 §§ 1040–1042) によると，一般疑問文と要求の文の音調は区別がつけられていない。Kingdon はこれを異なる型 (IH と III) に所属させている。Kingdon は上昇調に高低 2 つの型を認め (IH, IL) 他に 4 つの型を認めるので，合計 6 つの重要な型を認める。従って，Kingdon によると，上にあげた上昇調 II は IH, IL に分けられる。H. E. Palmer も Jones とは異って 6 つの Tone-pattern を認める (38 pp. 16–24)。Gimson は Kingdon に近いのであるが，彼は Falling, Rising, Falling-rising, Rising reinforcement of a fall の 4 つの型を区別し，Rising だけでなく Falling にも高・低 2 種類の区別をする (13 pp. 245–248). ところが，Lee の比較的新しい著書 *An English Intonation Reader* では，型の区別は簡単で，この点 Jones に近い。

このようなことは分節音素例えば英語の母音についても認められるが，超分節要素についてほど著しくはない。もし，ここで Jones と Kingdon 両者の記述が共に正しいとすると，人によって適切な音調が異なることになる。

Pike (39) はアメリカの構造言語学派流に，高さの変動と連接を認める。(彼の名称では Intonation と Pause となっている。) 彼と彼の妻の発した材料について彼は言う。

> … it should be remembered that a number of times the caution has already been given that others would read the passage differently, if they felt differently, and that the same persons could read the passage differently at different times. This is merely one reading by one person at a specific time. (39 p. 163)

このようなことは分節要素についてもあてはまる。しかし注意すべきことは，一般に分節要素ではこのような違いは不適切な (irrelevant) ものとされていることである。Pike は音調の型を組織 (system) に所

属するものと考えるのであるが (p. 172)，音調や休止によって，平叙文や疑問文の区別やその他文法的な範疇の区別はつかないとしている (pp. 163 ff.). また Pike のこの調査では，休止の種類と文中の位置，音調の種類と位置の関係にも規則制が認められない (pp. 152 ff.)。今述べたように，Pike は彼の構造の階層 (layers of structure) の中で，これらを 'gradient' なものと区別された 'systematic' なものに所属させている。そのような場合，上に引用した彼の見解からしても，音調の違いに対応する意味の違いとされたものが，'systematic' な層に所属するかどうか問題である。Pike はこの著書において Kingdon を批判しているが (p. 9)，Kingdon はこの Pike の著書を読んだ後で，*The Groundwork of English Intonation* を著した (cf. p. 264). この著書で，彼が示した Combined Tunes の例 (§§ 42–50) から重文と複文を選んで，その音調型の結合の仕方を見ても，主節と従節の違いや文中の位置の違いによって音調の型は区別されていない。これは Pike の場合と同様である。

Kingdon は 25 pp. 245–246 において，彼の 6 つの音調型と文の意味との対応を示しているが，比較的明かなのは，氏の認める上昇調高 (IH) が疑問を表わすことであるが，他の音調型では対応する意味が一様でなく，しかもあるものは言語的要素としての適切性が疑わしい。

Gimson が Falling と Rising と Falling–rising の型に断言 (assertion) や質問 (question) 等いかなる文が応じているかを述べた箇所を見ても，音調型と文の種類との対応は決して規則正しくはない。総じて認められることは，どの音調型にも殆ど同じ種類の文が対応し得ることである (13 pp. 254–259).

Lee は上昇調にも下降調にも高低の区別をしていないので，この点 Stubelius に書評で批判されている (*English Studies* Dec. '62). 型の区別の数を少くしていることから当然予想されるように，Lee によると，Kingdon の場合よりももって明かに音調型と文の種類の対応には適切性が欠けている (28 pp. 33 ff.).

O'Connor and Arnold は，口語において6つの音調型を認め，それと Head や Pre-head との組合わせにより，10の主要な型を認めるが，これらはやはり陳述とか疑問の区別に対応していなくて，読者の場面に対する態度に関係するとなす。それで，この場合もやはり，意味が言語的に妥当なものかどうか問題となる (35 pp. 32 ff.).

Pike も音調型を数多く認め，それに意味が対応しているとするが (38 pp. 44ff.), その意味の適切性はやはり疑わしい。大体学者の間で一致していることは，上昇調が未完了，下降調が完了・終結を意味するということであるが (cf. Lee 28 p. 71), しかしこれが言語的要素と認められるかどうか問題である。この点有坂秀世氏は強い疑念を抱きこれら形態を音韻論外のものとする (4 pp. 128 ff.)。

結論的に言って，ある音調は是認され他の音調は是認されないことがあるので，このような場合，この音調型の違いは言語的に適切である。但し，同一言語内でも，方言によって違いがあり，従って適切性の範囲が狭い。次に，音調型と音調型の間で意味の区別が認められない場合，当然意味の面では適切ではない。また意味があるとされる場合も，この意味とされているものが言語的に適切でないこともあり，またその適切性が疑わしい場合も稀ではない。この場合，それは言語と非言語の境界線をなしているのであり，文体論としては重要なものであろう。Heffner は音調型を身振りに接近したものと考える (17 p. 220). Martinet も音調が分離的な (discrete)単位でないことと言語的に境界線上にある (marginal) ことを述べている (34 pp. 37-38).

(5)

アメリカの構造言語学派は多く連接 (Juncture) を提唱し，これは言語形態の素材の一面に対して光を投じたことは否定出来ない。しかしこの連接の本質についても意見が一致していない。Roberts (43 p. 231) によると，次の文では，(1) brother にだけ文強勢がある，(2) right と brother にある，(3) man, right, brother にあることが可能であ

り，それによってこの文の中にある平板の連接の数は夫々 0，1，2 となる。

The man on your right is her brother.

このような違いが言語要素として適切かどうか疑わしい。また先に音調の箇所でも述べたが，人によっては連接が異なる。例えば，Roberts が上昇連接をなしているような箇所に， Hill はよく平板連接をなしている (cf. 43 pp. 232-233, 19 pp. 356, 362)。 それでこの連接の言語的妥当性に疑いを持つ人もいる (服部四郎 18 p. 290). Lehiste の調査の結果を見ても， 人によって異なることがわかる (29). Gimson は適切さの点において連接は強勢の型より劣ると考えている (13 p. 277).

（6）

さてこのような超分節要素は言語形態の素材であることは問題なく認められる。しかしこれが言語的に適切であるかどうかは別問題である。この適切性の基準の最も重要なものに言語的意味の区別に対応するかどうかがある。この場合，純生理的もしくは純心理的なものは内容からも形態からも除外される。しかしながら，このようなものを除外してもまだ後に残るもの即ち言語的形態として適切なものがある。例えば above / əbə́v / の / ˘ ′ / は適切な形態である (Gleason 14 p. 109). 同様に，超分節要素が言語的に適切なものとして認められた場合，文においても Hockett がなしたように，

^{3}John ^{2}treats his older sisters very ^{2}nicely^{2}. ↑

から先ず 3 2 2 2 ↑をとり出すことも認められよう (20 p. 178). Pike の言う種々の音調型もこの段階では適切であろう。

次にこれら形態に意味が対応するかどうかである。この段階でまたいくらかのものが考慮外におかれる。この点 Gleason が above の / ˘ ′ / を意味に対応する形態素 (Morpheme) となすことには賛成出来ない。above の / ˘ ′ / は音素 (Phoneme) の結合ではあるが，形態素

ではない。これは丁度，例えば，box の /-ks/ と同じように考えるべきであろう。Pike や Kingdon の音調型はこの段階では取扱いの対象外となる可能性がある。

次に意味に対応するものが文法的に適切なものであるかどうか問題になる段階に達する。今ここで文法と呼ぶものは，意味と形態を考慮して，比較的規則性を持つものが関係してくる。こういう意味での文法は傳統的な考方である。それは言語的単位を設定するにあたって，言語使用者の言語意識を想定し，それに従う立場である。連接については上にも述べたが，Lehiste の調査の結果では，内部開放連接 (Internal open juncture) は形態素とか語の句切りに必ずしも規則正しく対応していない (29 p. 47). 以下超分節要素のうち最も言語的に適切であると考えられる強勢 (Stress accent) をとりあげて，英語において，文法的適切性に関して，その重要性の度合を考慮してみる。

（7）

Hill は What are you working for? において，What are you trying to obtain? の意味で，for が第一もしくは第二強勢であれば副詞，Why are you working? の意味で，第三強勢もしくは弱強勢ならば前置詞とする。同様に，What was the picture painted like? において，「どんな風に」の意味で，like が第一強勢なら副詞，「何に似て」の意味で，like が第三強勢なら前置詞とする (19 pp. 19–20, 403–404). 同様なことは John tried to pass by the road. 等にもあてはまる (pp. 245, 283–284).

これはよく言われることである。例えば，Francis 11 p. 267 (He looked over the old fence.). そしてこの両品詞の強勢の違いも一般には認められている (cf. Kingdon 25 pp. 197–198, Jones 23 §§ 993–996). このような場合，両品詞の区別に，問題の語の強勢の他に，その位置や，挿入される副詞（句）の位置なども考慮される (Onions 36 p. 36,

Jespersen 22 III 13.9, Poutsma 40 XLVI 55-56, Allen 1 pp. 311-312, Fries 12 p. 75).

しかしこのような場合，文強勢が問題になっていることに注意しなければならない。副詞や前置詞では，単音節のものも珍しくなく，また超分節要素をも含めて同形で，両品詞と認められるものも珍しくないのであるから，単独で比較しては何ら区別出来ない。Hill は形態を中心にする立場をとり，Lees の *The Grammar of English Nominalization* の書評 (*Language* 38,4 '62) においても，強勢の重要さを述べているが，語強勢と文強勢の取扱い上の区別にはあまり注意していない。

ところがこの文強勢はまた一定したものではなく，このこともまた一般に認められている。Kingdon が普通の状態における品詞の区別と文強勢の対応関係を述べているが (25 pp. 170-171), これを見ても品詞の区別と文強勢の区別とは対応していない。彼によると (p. 173), He's a charming fellow. のような場合， 強勢は fellow になく charming にある。

更にこの普通の状態が時と場合によって変り得るのである。これもまた一般に認められている (cf. Jones 23 p. 264, Kingdon 25 p. 172). 例えば，Bolinger は to follow through～, to scatter off～, to shrivel up～ 等が名詞として使用されるき，そして実際の文中にあるとき，through, off, up 等の強勢が決して一様にききとられないこと，音調型によって異なり，また同一音調型でも，無強勢の音節が中間にあるかどうか (e. g. scatt*er* off), 文強勢や休止に関係しての位置等に左右されること，かくして例えば，wild flower と wildflower の強勢の区別も，They were wild flowers? では失われることを述べている (7). Pike も現実の話からは強勢だけでは複合語と語結合の区別はつかないとしている (39 pp. 79-82).

このような性質の文強勢であれば，これは前置詞についてもあてはまるであろう。Vanvik は前置詞が強勢を持つことが稀でないとする

(49 p. 92). 先ず第一に，前置詞そのものが形態上単音節のものもあるし，二音節もしくはそれ以上のものもあり，形態上の強弱が一様でない。更に意味の点からも，前後の語との比較において，前置詞の方がより重要なことが珍しくない。更に，前置詞同士が対照されることさえある。また文中の位置も異なり得る。このようなことによって前置詞の文中における強勢が異ってくるのであり決して一定していない。

I am going to found a new party.

What are you going to do *with* the party? (*English Studies* April '62 p. 97)

I forgot all *about* it. (Kingdon 25 p. 200)

They're *by* the window. (ibid. p. 199)

… and that government *of* the people, *by* the people, *for* the people, shall not perish from the earth. (Lincoln)

At the sale there will be representatives from all over the world. (*English Studies* April '62 p. 98)

事実 Hill のあげたような型の例に対して彼のような区別をしない人もいる。例えば，He ran up a bill., He ran up a hill. において，Haas は多くの方言において，Hill が前置詞となしたような連接や強勢の型を用いて両者の区別をしないと言う ('Linguistic Structures' *Word* 16, 2, '60). Schubiger は ˈrun ˈup a ˎhill と ˈrun up a ˎbill を対照させている (46 p. 102). このような場合，Zandvoort はリズムの影響を考慮している (52 p. 241). Kingdon もこれら不変化詞と結合している目的語の強勢に影響されるとしている (25 pp. 200-201). F. R. Palmer は，これら語が最後にきたときは強勢で区別がつくが，しかしそのときでも前置詞が対照されると強勢をとると言っている (37 pp. 181-182). Sledd でも時折 (sometimes) 強勢によって区別がつくと言っている (47 p. 125).

実際 Kingdon の *English Intonation Practice* の中で，これら前置詞や副詞の強勢を調べてみても，この両品詞の区別が強勢の違いに

決して対応していない。O'Connor and Arnold では，make up one's (own) mind の up が強勢を持たない例がいたるところに見られる (35 pp. 100, 105, 164, 191, etc.). 副詞と前置詞の区別を主として over と through をとりあげて研究した Dietrich も強勢によって必ずしもきめられないとする (9 pp. 19 ff.). Hill の例や F. R. Palmer が違いを認める場合のような文末にきていて，しかも前置詞が強勢をとる例もある (cf. Doodkorte and Zandvoort 10, Posthumus 40). これは一種の文体的特色かもしれない。しかし，Who by ?, What for ?, Who is he with ? のような結合では，前置詞が強勢を持つことは一般である (cf. Kingdon 25 p. 207). 反対に Jones (23 § 992) によると，Put your things on ! の on には強勢がない。

従って Hill の示した例において，彼の個人言語 (idiolect) を認め，更にそれがある方言のきまりであるとしても，その場合 Hill が問題にしているのは，普通前置詞とされているものの分布の一部であるに過ぎない。他の分布の場合をも考慮してこれらを前置詞としてまとめる場合，何が基準となってまとめられているかを考えなければならないだろう。従って強勢以外の基準によって認められるこの両品詞の区別がときには強勢の違いによっても示されることがあるという結論になるのであって，この強勢の違いによって両品詞が区別されるものではないだろう。

先に述べたように，Hill は形態を中心にして考えているのであるから，彼の態度はその限りにおいて是認されるが，もし彼の考えることが，言語現象としての品詞の違いが強勢の違いによって生ずるというものなら，そのような分類は決して規則的な簡単なものではなく，収拾がつかない程困乱したものになるであろう。何故なら，方言によって文体によって，品詞が異なることになる。また，ある狭い範囲に適切な英語内において，文強勢だけによる分類は殆ど価値のないものになるであろう。

（8）

しかし語強勢は文強勢よりもかなり安定性があるようである。この場合，単に強弱の度合の違いだけでなく，その位置の違いがからみ合ってくる。語強勢またはその位置の違いによって意味が異なることはよく知られている。強勢と共に音価も変ることが普通であるが，しかし，billow, below は強勢だけの違いと考えられ，アメリカ英語では，differ, defer もそうである。しかしこれらの違いは，例えば，right, light の /r/ と /l/ の違いのように，語彙的なものであって文法的なものではない。しかし同一種類の意味の違いが品詞の違いに関係していることもよく知られている。ここで文法の問題となる。

このような場合，上に述べたように，分節音素が変らず強勢に関してだけ変ることもあるが，このような例は比較的少く，強勢の変化と共に分節音素も変る場合がより普通である (cf. Jones 24 pp. 145, Pike 39 pp. 82-84). そしてこの強勢と品詞との関係は三音節以上の語にも認められるが，二音節の語に最も普通である (cf. Jespersen 22 1 pp. 182-184).

それで，この事情を「語学教育」Nos. 261-262 にあげられている英語必修語彙 5,000 語について調べてみた。先ず二音節語で n., a. と v. の対照を強勢の場所の違い，即ちそれが第一音節にくるか第二音節にくるかによって区別するものを求めた。例えば，instinct は n. /ˈ-/, a. /-ˈ/ の如く，n. と a. の違いを強勢の位置の違いによって示しているが，この場合意味の連関は弱い。一般には，n., a. 対 v. の例が普通である。Vanvik が Jones の *English Pronouncing Dictionary* (11th 1956) を調べ，同一書形態で（主として）強勢によって，単に名詞対動詞の違いだけでなく，一般に品詞を異にするものを，音節の数による区別をせずに調べ，それを極く僅か修正したものを見ても，名詞と形容詞との対立はある (293 のうち 38). しかし，arithmetic, arsenic 等極く少数を除いて，これら両品詞は起源的に異なる語である

か，同一起源でも，意味の連関が弱まっているか，もしくは同一音形態でも構わないものである (49 V).

さて調査した語彙には，品詞が示されていないが，同形異義語がある場合は，推測される初級の語を選んだ。辞書は Jones の発音辞典第11版を用いた。この辞書に従って，二音節語を選ぶ際，battle, handle, ample, idle, etc. のように，子音で音節をなすものは考慮外においた。これに関しては書形態は重要視しなかった。従って，garden, level, travel, etc. も除かれた。present n. / préznt /, v. / prizént /; rebel n. / rébl /, v. / ribél / のような対応もあるのだから，garden, level 等をも考慮してもよいのであるが，この調査では除いた。但し，carol / kǽrəl / のように省略可能なものは数えた。

このように，主として Jones の辞書に依存したので，この辞書で品詞の記載されていない，labour, thunder, wander, wonder, yellow 等は，n. または a. と v. の用法があっても，この調査では考慮外においた。しかし少数ながらこの辞書の記載をそのまま受け入れなかった場合もある。例えば，digest の n. と v., utter の a. と v. 等は共時的な立場からは，意味上連関がないので，考慮外においた。また habit は Jones の辞書に s. v. とあるが，v. は普通でないので考慮外におき，同様に，foster も s. v. とあるが，s. は普通でないので考慮しなかった。

このようにして二音節語を選び，n., a. と v. の区別を強勢の位置によっているものとあげると，下のように 42 である。

absent, abstract, accent, combine, compound, compress, concert, concrete, conduct, confine, conflict, contact, contest, contract, contrast, convert, decrease, essay, export, extract, frequent, import, impress, increase, insult, perfect, perfume, permit, present, produce, progress, project, prospect, protest, rebel, record, subject, survey, suspect, torment, transfer, transport.

これらのうち，次の 12 は示した発音の如く動揺している。

combine n. / − ˊ /, contact v. / ˊ − /, decrease n. / − ˊ /, v. / ˊ − /,

essay v. / ˈ – /, export v. / ˈ – /, import v. / ˈ – / (稀), increase n. / – ˈ /, v. / ˈ – /, perfect v. / ˈ – /, perfume v. / ˈ – /, prospect v. / ˈ – /, subject v. / ˈ – /, survey n. / – ˈ /,

従って安定しているものは30となる。これら語のうちには，convert, suspect のように，名詞が具体的に人や物と意味するものもあるが，多くの場合名詞は抽象名詞である。

次に強勢によって区別しないものは356である。このうち，anchor, blossom 等 n. の意味が具体的な実体を意味するもの108を数えた。これを除くと，残りは248となる。従って問題は一般に n. 又は a. 対 v. でなく，もっと制限されていることになる。このような語において，名詞と動詞のうちいずれが基礎語，いずれがそれを基にして零接辞を持つ派生語と見られるかと言うと，その型は必ずしも一様ではない (cf. Marchand 33). 大体，名詞が基礎語で動詞が派生語の型が anchor, blossom 等の108の語群であり，反対に動詞が基礎語で名詞が派生語の型が248の語群であり，両品詞の区別を音形態に示すのは，多くの場合後者の語群に所属するのであり，しかも名詞の意味は抽象的なものが多い。この248のうちには，次の6語が共に示された発音をも許すので，この点動揺している。

comment v. / – ˈ /, discharge n. / ˈ – /, forecast v. / – ˈ /, incline n. / ˈ – /, research n. / ˈ – / (稀), reverse n. / ˈ – /.

従って，先の12を加えると，時には区別するものが18となる。かくして，区別しないもの，区別し得るもの，区別するものの数の割合は242：18：30となる。

次に，この290語（42＋248）を，アメリカ英語ではどうなるか，Kenyon and Knott の *A Pronouncing Dictionary of American English* (1953) によって調べてみた。両辞典とも発音辞典のため，他の種の辞典を使ったら取上げられたであろう語も取上げられなかった場合も当然生ずる。例えば，commerce は5,000語の中にあり，Kenyon and Knott では n. と v. で発音が区別されているのであるが，Jones

では s. v. となっていないので，この比較調査から除かれている。

両言語において，個々の語では多少の違いが生じてくる。例えば，Jones では区別しているもののうちで，contact, contract, prospect は Kenyou and Knott では区別されていなく，accent, permit 等は区別しなくてもよい。又 Jones では区別もし得るものの中で，discharge, reverse は Kenyon and Knott では区別していない。反対に Jones では区別していないもののうちで，upset が区別され，更に address n. / ˈ – /, combat v. / – ˈ /, detail v. / – ˈ /, recall n. / ˈ – /, romance n. / ˈ – /, sojourn v. / – ˈ / 等は区別も出来る。また essay は同じく n. でも「論文」の意味のときは / ˈ – / であり，「試み」のときは / – ˈ / となり動詞と同形であり，suspect も「容疑者」のときは / ˈ – / で，「疑い」のときは / – ˈ / である。従ってこのような場合，名詞の意味の違いを強勢の位置の違いで示している。同様に，v. abstract も意味によっては / ˈ – / となる。それで，区別しないものと，区別もし得るもの，区別するものの数の割合は 243 : 16 : 31 になり，結果はイギリス英語と大差はない。

また，以上の結果は Jones と Kenyon and Knott によったものであるから，他のものを参照するとまた違いが生ずる。例えば，upset はイギリスでも区別することもある (Vanvik 49 p. 54). 人によって，dispute (n.) は / ˈ – / となり，動詞と区別され，反対に contrast (v.) は / ˈ – / となり名詞と区別されない (Gimson 13 pp. 227, 229). イギリス英語でも，accent (n. v.) / ˈ – /, conflict (v.) / ˈ – /, frequent (v.) / ˈ – / となることもある(Vanvik 49 pp. 52–53).

(9)

次に三音節以上のものを調べる。この場合は，子音が音節の中核をなすものも数えた。先ずイギリス英語について Jones によると，第一強勢の位置の違いを示すものは 4 (attribute, overflow, overthrow, overwork). 但し overwork は意味によっては，名詞も動詞と同様 / ˈ

－ˈ/ である。

第二強勢の有無によるのは，n. or a. / － it /, v. / － eit / の － ate 形の語 12，n. / －mənt /, v. / － ment / の － ment 形の語 6 である。但しこの場合，分節音素も異なるのであり，強勢が両者の区別をしているか疑問である。また － ate 形 12 のうち，alternate では第一強勢の区別がより重要であり，また 4 つは名詞でも第二強勢を持ち / － eit / となることもある。

Jones の辞典では，これらには総て第二強勢がつけられていない。従って，全部で22あるが，確実に強勢の型で品詞の区別をしているものは，初めの 4 と alternate で合計 5 である。他に区別をしないもの 57 あり，そのうち名詞の意味が具体的な実体を表わすものが 12 あり，その他のものが 45 となる。

attribute, overflow, overthrow, overwork.

alternate, associate, certificate, delegate, deliberate, desolate, elaborate, estimate, intimate, moderate, predicate, separate（うち associate, delegate, estimate, predicate では n. でも / － eit / 形あり）.

complement, compliment, document, experiment, supplement, ornament.

従って，区別しないもの 45，区別もし得るもの 4，区別するもの 18 となる。

この67語をアメリカ英語ではどうか，先の場合と同様 Kenyon and Knott の辞書で調べてみる。多くのアメリカ英語の辞書のように第二強勢が示されている。さて第一強勢の位置について，attribute, overflow, overthrow, overwork は Jones の場合と同じである。n. としての overwork の意味の違いによる強勢の違いも第二強勢の有無を除いては同じである。第二強勢の有無に関しては，－ ate 形では，区別しなくてもよいもの 3 あり (associate, delegate, estimate)，alternate は最後の音節だけで区別されるのも普通である。－ ment 形では，experiment は区別していない。しかし discipline は / ˈ－－ / と / ˈ－ˌ /

で区別し，interest も区別もし得る。従って，区別しないもの 44，区別もし得るもの 4 (associate, delegate, estimate, interest), 区別するもの 19 となる。

discipline の場合を除いて，第二強勢の有無と共に分節音素も変るのであるが，この場合この強勢の有無をどう見るか問題となる。アメリカ英語ではリズムを好んで，イギリス英語より第二強勢を好む。/ ˈ – ˌ / 型は品詞の区別なくよく見られる。上の 44 語のうち，即ち n. or a. 対 v. の区別を形態で示さない語のうち，15 が / (–) ˈ – ˌ / 型を示している。従ってこの型は，現在のところ，一般的には品詞の区別に関係なく，純音声学的又は純音韻論的水準の現象であると思われる。

しかし上の – ate, – mentの語の場合は，第二強勢の有無によって品詞の違いを示しているのであるが，それと共に分節音素も異なる。いずれをより重要であるかとみなすことによって異なる結論に達する。ともかくイギリス英語よりも第二強勢の役割は大と考えるべきであろう。しかしそれは必ずしも安定した機能ではない。– ate については，Pike は第二強勢を重要視せず，それは分節音素に影響されているかもしれないとする (39 pp. 78, 83–84). – ment については，*Webster* によると，名詞でもときには \ – ˌment \ もあり，動詞でもリズムによって \ – ˍmənt* \ もまた普通のようである。Bronstein (8 p. 256) によると，人によって compliment, ornament 等では，形態上両者を区別しない。discipline では，*Webster's Third New International Dictionary*, *The American College Dictionary*, *Webster's New Collegiate Dictionary*, *Webster's New World Dictionary* 等は形態上品詞の区別をしていない。

因みに，先にあげた Vanvik の調査によると，全体で 248 項目のうち，同一音素の結合で強勢の違いだけによらなければならないものは約 60 である。そしてこれには勿論 n. (a.) 対 v. だけが考慮されているわけではない (49 p. 54).

---

* 下につけられた ˍ は強勢がなくなる印。

強勢を利用するより同一形態で両品詞の働きをさせる方が遙かに普通なのであるが，さて5,000語に関して，その他の方法によって，n. と v. を区別しているものの主なるもの及びその数は次のようである。共時的意識によってまとめたもので，中には通時的には同じでないものもまとめられてある。

(1) admire－admiration 型　　66

語彙中の名詞形を中心に考えて選び，例えば，admiration の如く，対応の動詞形はあるが，語彙にあげられてないものを含む。以下同じ方法による。

(2) act－action, commit－commission, decide－decision 型　　75　(他に対応形が形容詞と認められる ambition, superstition, suspicion がある。)

(3) accord－accordance 型　　25　(他に consequent－consequence のように対応形が形容詞のもの　27)

(4) accomplish－accomplishment 型　　33

その他，少数の－ing (beginning, blessing, building, engineering, feeling, learning, training, undertaking, warning), －al (approval, arrival, burial, proposal, refusal, trial), －ery (delivery, discovery, flattery), －ure (departure, failure, mixture, pleasure, pressure, procedure), /s/：/z/ (abuse advice (advise), excuse, use), /s/：/d/ (defence, expense, offence, pretence), /f/：/v/ (grief, relief, reproof). 他にも幾つかある (growth, laughter, etc.).

但しこれら接尾辞は今問題にしている動詞の派生語としての名詞についてであり，従ってこれら接尾辞の独立性は他の種類の派生語によっても支援されている。例えば，brave－bravery, moist－moisture, etc. これら派生語の型には生産力がないと思われるものもあるが，幾つかの型の派生語は強勢の違いの型によるものよりは数が多いことが

わかる。更にこれら総ての型よりも数が遙かに多いのは，同一形態で n. or a. と v. を兼ねる語の型である。この型は強勢の型が問題にならない一音節語でも極く普通である。

派生語一般について言うと，動詞から動作主名詞を作る－er 形は殆ど制限なく作られるという (cf. Marchand 32 pp. 215 ff., Lehmann 30 p. 180). また形容詞から－ness を伴って派生する名詞の数も非常に多い。調査した語彙には，business, darkness, illness 等は別として，原則として－ness はあげてない。この語彙の中でも，形容詞から派生するまたはそれに対応する －ity, －ety 形の名詞，例えば anxiety, certainty 等は 43 を数えた。これには，utility に対する utile のように形容詞が稀であったり，反対に hospitality, poverty のように対応の形容詞がないかまたは関連が弱いものは除いてある。

(11)

数は以上のようであり，この両品詞の区別も，ある制限された型の語に認められるのであるが，もっと形態そのものの内容に入ってみる。上の語例を見ても，強勢は単独で分節音素の形態如何によらず位置を変えるというのではなく，接辞もしくは少くとも起源的には接辞であったものとの結びつきによって，殊に少数のそれとの結びつきによって，その力を発揮していることがわかる。例えば，二音節語の例のうち，con－(com－) の例が 13，pro－ の例が 5，合計 18 でこれだけでかなりの割合になっている。三音節以上では，－ate, －ment 型が大部分を占めている。その他一般的に言って，inter－, over－, re－ 等の語が目立つ。分節音素に影響されず，強勢だけの違いによるなら，例えば envy の如きも以前は第二音節に強勢を持ち得たのであり(Jespersen 22 I p. 178), 現在でも refer/rifə́ : / の如き強勢形態も現実に見られるのであるから，もっとこれが利用されてもよい筈である (cf. Marchand 32 pp. 92, 307).

Jespersen は *M. E. G.* I pp. 173–184 において，この強勢の違いに

関する例をあげているが，それを見ても，現代でも動揺があり，また時代によって異なることも窺われる。彼は次のように言っている (p. 175).

In many instances the stress difference has been given up; in others it seems to have been recently developed.

Pike (39 pp. 82-84) も Jones (23 p. 146) も，この強勢だけによる区別の適用範囲を大なるものと考えていないようである。殊に第二強勢に関してそうであろう。Marchand は同一形態を用いる傾向の方が強いと言う (32 p. 307).

Fries は彼の言う Class 1 の語が他の Class の語と比較されたとき，その特徴形の一つとして súbject, subjéct ; óbject, objéct を例として，強勢型の違いをあげている (12 p. 114). 文法を先に述べたようなものと考えても，これは確かに文法の問題となり得る。しかし上の調査からしてみると，この強勢型なる形態は文法的には派生形態の中に位置を占め，しかも適用範囲も狭く，また時間的にも，地域的にも，また個人的にも安定性を欠き動揺しているものである。

語強勢が以上のようなものであれば，それよりも安定性の弱い文強勢・音調・連接等の文法的性質は更に弱いものと思われる。最近の研究の結果では，英語の強勢と言われてきたものは，実は高さ・長さ・強さそれに音価そのものなど関係している複合的なものである。それなのに，一部の学者がなすように，これらを分析して，高さ 4，強さ 4，連接 4 を認めるというようなことは言語的に適切なものかどうか疑わしい。少くとも現在の段階では無理でなかろうか。1957 年 Ann Arbor の会議で，出席者の約半分が英語強勢の 4 段階をききわけることが困難であるとしたという (William-S-Y. Wang 50). Hall も三段階に賛成している (16 pp. 109-110).

総じてこれらは語強勢を最も安定したものとして，他はそれより安定性が弱いものであり，従って文法的にも利用されることが少く，そして言語的に適切である場合でも，それは社会的制約が弱い点で，非

言語的要素に接近しているものではなかろうか。これは変形生成文法派式に記述してみても変りないことであろう。

参 考 文 献

1) Allen, W. S.: *Living English Structure* Longmans 1959.

2) ——: *Living English Speech* Longmans 1959.

3) Anderson, E. T.: *The Intonation of American English* 安倍勇訳 研究社 1958.

4) 有坂秀世:「音韻論」三省堂 1940.

5) Armstrong, L. E. and Ward, I. C.: *A Handbook of English Intonation* Heffer 1954.

6) Bloch, B. and Trager, G. L.: *Outline of Linguistic Analysis* Linguistic Society of America 1942.

7) Bolinger, D. L.: 'Ambiguities in Pitch Accent' *Word* 17, 3. 1961.

8) Bronstein, A. J.: *The Pronunciation of American English* Appleton 1960.

9) Dietrich, G.: *Adverb oder Präposition* Niemeyer 1960.

10) Doodkorte, A. C. J. and Zandvoort, R. W.: 'On the Stressing of Prepositions' *English Studies* 43, 2. 1962.

11) Francis, W. N.: *The Structure of American English* Ronald 1958.

12) Fries, C. C.: *The Structure of English* Harcourt 1952.

13) Gimson, A. C.: *An Introduction to the Pronunciation of English* Arnold 1962.

14) Gleason, H. A.: *An Introduction to Descriptive Linguistics* Holt 1961.

15) Haas, W.: 'Linguistic Structures' *Word* 16, 2. 1960.

16) Hall, R. A. Jr.: *Introductory Linguistics* Chilton 1964.

17) Heffner, R.-M. S.: *General Phonetics* University of Wisconsin Press 1960.

18) 服部四郎:「言語学の方法」岩波書店 1960.

19) Hill, A.: *Introduction to Linguistic Structures* Harcourt 1958.

20) Hockett, C. F.: *A Course in Modern Linguistics* Macmillan (New York) 1958.

21) Hornby, A. S.: *The Teaching of Structural Words and Sentence Patterns* Oxford 1959.

22) Jespersen, O.: *A Modern English Grammar* Allen 1909–49.

23) Jones, D.: *An Outline of English Phonetics* Heffer 1956.

24) ——: *The Phoneme* Heffer 1962.

25) Kingdon, R.: *The Groundwork of English Intonation* Longmans 1958.

26) ——: *English Intonation Practice* Longmans 1958.

27) Lee, W. R.: 'Fall-Rise Intonation in English' *English Studies* 37, 2. 1956.

28) ——: *An English Intonation Reader* Macmillan (London) 1960.

29) Lehiste, I.: *An Acoustic-Phonetic Study of Internal Open Juncture* Karger 1960.

30) Lehmann, W. P.: *Historical Linguistics* Holt 1962.

31) Lloyd, D.J. and Warfel, H. R.: *American English in Its Cultural Setting* Knopf 1956.

32) Marchand, H.: *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation* Harrassowitz 1960.

33) ——: 'On a Question of Contrary Analysis' *English Studies* 44, 3. 1963.

34) Martinet, A.: *A Functional View of Language* Oxford 1962.

35) O'Connor, J. D. and Arnold, G. F.: *Intonation of Colloquial English* Longmans 1961.

36) Onions, C. T.: *An Advanced English Syntax* Kegan Paul 1929.

37) Palmer, F. R.: *A Linguistic Study of the English Verb* Longmans 1965.

38) Palmer, H. E.: *A Grammar of Spoken English* Heffer 1927.

39) Pike, K. L.: *The Intonation of American English* University of Michigan Press 1953.

40) Posthumus, J.: 'Further Comment on the Stressing of Prepositions' *English Studies* 43, 6. 1962.

41) Poutsma, H.: *A Grammar of Late Modern English* Noordhoff 1914–29.

42) Ripman, W.: *English Phonetics* Dent 1952.

43) Roberts, P.: *Patterns of English* Harcourt 1956.

44) ——: *Understanding English* Harper 1958.

45) Schlauch, M.: *The English Language in Modern Times* Państwowe Wydawnictwo Naukowe 1959.

46) Schubiger, M.: *English Intonation* Niemeyer 1958.

47) Sledd, J.: *A Short Introduction to English Grammar* Scott 1959.

48) Trager, G. L. and Smith, H. L.: *An Outline of English Structure* American Council of Learned Societies 1957.

49) Vanvik, A.: *On Stress in Present-Day English* Norwegian Univer-

sities Press 1961.
50) Wang, W. S-Y.: 'Stress in English' *Language Learning* 12, 1. 1962.
51) Whitehall, H.: *Structural Essentials of English* Harcourt 1956.
52) Zandvoort, R. W.: *A Handbook of English Grammar* Longmans 1965.

(本論文は「中島文雄教授還暦記念論文集」所載のものと同じ趣旨のものである。しかし同論文集では，紙数の制限のため省略した点が多かったので，本稿ではそれを補った。参考文献も二，三多くなっている。尚本稿を書き終えた後で見た *Linguistics* 21 (1966) 所載の Joe E. Pierce の論文 'The Supra-segmental Phonemes of English' も同じ趣旨で超分節要素を論じている。またその後見ることのできた M. A. K. Halliday の *Intonation and Grammar in British English* 及びこれに対する D. Crystal の書評 (*Language* 45, 2 (1))も本稿では参照することができなかった。)